# 博士学位論文審査要旨

２０１０年9月２８日

論 文 題 目：　ヘブライ語旧約聖書における会議について
　　――動詞「立つ」との関連の考察に向けて――
学位申請者：　宮田　玲（みやた　あきら）
審 査 委 員：
　主　査：　神学研究科　教授　石川　　立
　副　査：　神学研究科　教授　水谷　　誠
　副　査：　神学研究科　教授　越後屋　朗

要　　旨：

本論文は、唯一神を語る旧約聖書の中にありながら複数形で呼ばれる神（エロヒーム）の役割・機能を「神々の会議」の言語学的な検討を通して明らかにしようとするものである。神の役割・機能は無論限定することはできないが、本論文では、従来、見落とされてきた旧約聖書における神の働きについて、これを提示しているのである。

従来の研究と比較して、本論文全体の特徴は以下のように指摘することができる。旧約テクストにおける神の会議は、これまでおもに古代オリエント世界との比較において考察されてきた。唯一の神を語る旧約テクストの中に古代オリエントの多神教世界の残滓があることが指摘されており、その残滓の一つが神の会議の描写なのである。唯一の神を語る旧約テクストは、古代イスラエル周辺の多神教の表象を引き継ぎながらも、唯一神ヤハウェに神々の会する会議の長という最高位を与えていると理解されてきたのである。

旧約テクストにおける神の会議の表象を古代オリエントの多神教世界と対比させて理解しようとする従来の研究に対し、本論文はヘブライ語旧約聖書原文で用いられている語彙に言語学的方法論をもって切り込み、テクスト内での会議の描かれ方を探究しようとしている。会議という表現によって描かれている内容をテクストに即して把握するには、同義語や関連語のそれぞれの語彙の意味を画定することが必要となる。本論文は、「会議」という名詞、会議の前提条件を描出する「集まる」という動詞、さらには「集まる」と訳され得る「立つ」に相当する動詞に関して、翻訳には反映されない原文語彙の意味を検証している。その結果、「会議において立つ」にあたる表現によって、法的証人の含意が担われていることが示唆され、ここから、従来おもに類比的に王や父という役割を持つ者と理解されてきた旧約テクストの神を、証人という役割を持つ者と捉える別の見方が得られたのである。

以上のような本論文の独自性は、次のように展開され、結論へと至っている。

第１章では、言語学的アプローチについて、とりわけ、意味場、縁語関係、換入可能性、同義と同一指示対象の区別などについて詳細に論じ、本論文に最もふさわしい方法論を検討している。

第２章では、「会議」について、まず古代オリエントの諸文献の記述について触れ、次に旧約テクストの「会議」にあたるいくつかの聖書ヘブライ語語彙に検討を加えている。この結果、訳文ではともに「会議」と訳される「エダー」と「ソッド」が、それぞれ、前者は古代オリエント社会の専制的王権と対極的な原始民主政の母体とされる「会議」に類比できる語、後者は王をとりまく諮問会議との類縁性が指摘される語として区別されなければならないことが明らかになった。

第３章では、複数構成要素が「集まる」という、会議の構成要件にあたる動詞を詳しく検証し、いくつかある類義語に、一緒になるという一体性を示す語句との近接性を見出している。

第４章では、一般的に「立つ」と訳される動詞（ニツァブ／ヤツァブ）が「集まる」と訳されうるケースを取り上げている。この際、「立つ」と「座る」というわれわれが通常対義語と見なす動詞を手掛かりとして検証を進め、結果、「座る」にも「立つ」にも、身分の上下や支配性を表す用法のみならず、法的場面に参与する際の術語としての用法があることが明らかにされた。特に、ニツァブ／ヤツァブには、当事者としてではなく、証人として場に参加する意味あいがあると推察されるのである。

最後に、これまでの論考結果を適用して、詩編８２篇１節の「神は神聖な会議（エダー）の中に立ち（ニツァブ）」の句を取り上げ、解釈を試みている。論者はこの解釈を通して、この一節に、裁き手としての最高神という従来の解釈とは別様に、証人としての神が表現されていると論じる。

以上、本論文は、ヘブライ語テクストにおける「会議」とその関連語の検討を経て、旧約聖書の神に「証人」の表象と役割のあることを明らかにしたのである。

本論文は唯一神が複数形で呼ばれる意味を、「神々の会議」の表現を切り口として検証した、詳細で総合的な言語学的、聖書学的な研究であるばかりか、硬直した神の表象に対する問題提起にもなっている。困難なテーマについて意欲的に取り組んだ論文として高く評価でき、よって、本論文は、博士（神学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

# 総合試験結果の要旨

２０１０年9月２８日

論 文 題 目：　ヘブライ語旧約聖書における会議について
——動詞「立つ」との関連の考察に向けて——
学位申請者：　宮田　玲（みやた　あきら）
審 査 委 員：
主　査：　神学研究科　教授　石川　　立
副　査：　神学研究科　教授　水谷　　誠
副　査：　神学研究科　教授　越後屋　朗

要　　旨：

宮田　玲氏は、1998年3月、同志社大学大学院神学研究科博士課程の前期課程を修了し、1998年4月、後期課程に入学して研究指導を受け、所定の要件を満たして2007年3月退学した（2003年4月－2005年9月および2006年4月－2006年9月、休学）。その後も研究を進め、2010年3月に学位論文を提出した。2010年9月28日午後1時より、神学研究科委員会は宮田氏に対して約２時間の総合試験を実施し、氏から充分な聖書神学的素養を背景にした的確な応答を受け、氏が学位請求論文の主題領域について深い洞察を有していることを確認した。研究に必要な語学力については、博士論文執筆のためのヘブライ語、英語、ドイツ語、フランス語の文献を正確に読みこなせていることにより充分なものと認められる。

以上の結果により、総合試験に合格であると認める。

# 博 士 学 位 論 文 要 旨

論 文 題 目： ヘブライ語旧約聖書における会議について ——動詞「立つ」との関連の考察に向けて——

氏　　名： 宮田　玲

要　　旨：

ヘブライ語旧約聖書に、神々の会議、パンテオンについての描写が残されていることについては、以前から指摘されてきた。論文では、唯一の神ヤハウェを語る旧約テクストにおいて、天上の神々の会議という表象が持つ意味合いを検討した。その際、描写に用いられている複数の語彙の意味上の相違を取り上げるという、言語学的な方法論を用いた。そして、翻訳によって覆い隠される原文の意味を拾い上げることを試みた。

テクストにおいて唯一の神だと語られるヤハウェであるが、会議で他の神的な存在者にとりまかれているという記述をいくつか見出すことができる。会議の中で、ヤハウェは神々の王として描かれている。そこには、ウガリトにおけるパンテオンの長、El 神の位置との共通点が見出された。一方で、古代オリエント世界においては総じて、天上の神々の会議も、地上社会における人々の会議もともに、王を決定する力や司法的権限を有していた。だが、旧約テクストにおいて、会議自体は、王たるヤハウェの賛美のためのとりまき、あるいは神の意思の媒介者が属する場として背景へ退いており、この点では相違が認められた。換言すれば、旧約テクストに描かれる神々の会議とは、ヤハウェが王として頂点に位置する集合であって、ヤハウェを際立たせる役割を担うものである。

会議を表現するために用いられる旧約ヘブライ語は、עֵדָה、קָהָל、סוֹד の三語である。いずれもが、人間の会議を表わすときにも使用される。これらの語彙が使用される文脈と主題の場についての比較対照を行なった結果、特に王をめぐっての意味の差異が顕著に認められた。עֵדָה は王とは接点のない会議であり、むしろ王を決定する力を有していた。対して、קָהָל と סוֹד はともに王と関わる文脈にあり、前者は王を内に含まない群集的な集団、後者は王を内に含む宮廷の会議として把握された。したがって、同じ「会議」との訳が付されても、それぞれの語彙が描き出す「会議」の性格には差がある。旧約テクストにおける王としてのヤハウェをめぐる会議を表現するには、おそらく סוֹד が適切な語彙である。対照的に、עֵדָה は、ヤハウェの王的な会議を表現するに相応しい語彙ではない。

ついで、会議を形成するための「集める」という動詞の性格について取り上げた。その結果、「集める」に相当するヘブライ語の動詞、אסף、קבץ や、「会議」を意味する קָהָל と סוֹד から派生したと思われる動詞、קהל と יסד によって描写される事態には、何らかの条件による選抜が含まれていないことが確認された。そして、ここでも、עֵדָה の根と関わる動詞 יעד は、他の

二つと違って、「集まる」ではなく「出会う／落ち合う／待ち合わせる」という意味合いを含んでいた。しかし、その場合でもやはり、たとえある一定の範囲内に限定されていたところで、そのすべての成員が集まって一緒になることを表現していた。ここから、ひいては、会議とはいわば選良の集団ではないことが導き出せる。

さらに、会議において「立つ」ことが、「座る」神に従属することを意味する表現であるようにみえることに注目し、これにも検討を加えた。「座る」に相当する動詞 **ישב**、および座ることを象徴する「王座」、**כִּסֵּא** には、確かに、ともに支配性の色合いがあった。だが、会議において座ることは、支配ではなく、裁きに参加していることの表現であると捉えたほうが適切だろうと考察された。翻って、「立つ」に相当する動詞 **עמד**、**קום** についても、従属性への指示が明白には認められないことが用例の走査によって確認できた。そして、いずれの「立つ」も、同じく、裁きの場に関係を持つ語彙であった。

「立つ」については、前世紀に Deir ʿAlla で発見された碑文、「(神々が) 会議において立つ (*nṣb*)」が「会議に集まる」と解釈されている。*nṣb* に相当するヘブライ語の動詞、**נצב／יצב** も、やはり通常は「立つ」と訳される語であり、**עמד**や **קום** の同義語として位置づけることができる。だが、この **נצב／יצב** を精査した結果、**עמד**や **קום** と同じく地面に垂直方向の体勢を指してはいても、力のはたらく方向性が上から下に向かってであった。また、派生語も含めて、境界性、異邦性、第三者性、不安定性といった、いずれとも定めがたい状態を含意していることが読み取れた。確かに、複数の人々にこの動詞があてがわれたときには、「集まる」と訳すことは可能であるが、それ以上に「見る」という事態に繋がる状態を表現している。裁きの場においても同様に、当事者としてではなく立ち会って見ることが導かれる。即ち、会議において「立つ」ことが、**נצב／יצב** でもって描写される場合、見届ける証人性が示唆されるのではないかと推測された。

以上のような結果を、詩編８２篇１節の「神は神聖な会議（**עֵדָה**）の中に立ち（**נצב**）／神々の間で裁きを行われる」の解釈に適用してみると、これまでの解釈では読まれてこなかった意味合いが浮かび上がる。つまり、**עֵדָה**という会議には王は含まれないので、冒頭の神は王ではない。そして、立つ（**נצב**）こととは、救うことでも、告発することでもなく、立ち会って見ていることである。したがって、この一行は、会議の長としての最高神を描くものではなく、見届ける神の証人性を示すものとして捉えることができるだろう。